
年上の彼女と年下の彼

富樫 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上の彼女と年下の彼

【Nコード】

N1023M

【作者名】

富樫 聖

【あらすじ】

毎子の親友の美鈴はショタコン。その美鈴の目下の想い人は六歳年下の小学生、高広だ。毎子は彼に会いたい美鈴に強制的につき合わされる日々を送っている。

ところが何をトチ狂ったのか、毎子はその高広から告白されてしまつて？

つて、あたしはショタじゃないんだけどっ！？（血の涙）

美鈴と高広に振り回される毎子の話。

前編

あたしの友人、川崎美鈴はシヨタコンである。

シヨタコンというのは、つまり、少年愛好者のことで、自分の子供でもないのに、そこらを走り回っている小学生位の男の子に愛着もってしまっている人のことを言う。

「だって、だって、可愛いじゃない。純真で打算もないし、真っ直ぐで元気だし。……やっぱ男の子はあの頃が一番輝いているわぁ。それを見ても何も感じないなんて、絶対変。同年代の男よりずっと素敵なんだから。それに……半ズボンから出ている足が、どこなく色っぽくて……大人だとあの未発達故の色香はだせないわよ……」
うっとりと言う美鈴の方がよっぽど少女。……外見はともかく。

あたしはあきらめの胸中で、陶醉している美鈴を尻目に、ため息をついた。

ああ、何が楽しくて、高二の女の子が弁当食べながら、ランドセル・半ズボン少年の話をしなくしゃならないの？

普通は、もっと別の話になるもんじゃない？ 一応青春期なんだし。

なのにそれが、口を開けば反抗期も終わりきらない、小学生の話ばかり。

「ねえ、毎子まいこお。今日は高広くん達、公園で遊んでいるかな？」

高広たかひろ、という名にどきりとする。

「最近の子供って塾ばかり行ってて、放課後集まって遊ぶことが少ないんだもの。……つまらないわっ」

ぶくり。大人っぽい顔をふくらませて、ブツクサつぶやく。

そう、美鈴はどう見ても大学生、もくしはOLにしか見えなくらいに老けた顔をしているのだ。

本人けっこうそれを気にしてたりして、シヨタに走るのはそのコ

ンプレックスの反動に違いないと、あたしは思っている。

「……きつと塾行つてて、誰もいないんじゃない？」

例の高広はどうだか知らないけど……。

奴は塾なんぞには通っていないはずだ。

「うう、ひどい。意地悪だわ。毎子だつて彼らに会うの楽しみにしているくせに……あたし、知っているんだからね」

「じよ、冗談じゃないわつ。誰がガキ共に会うのを楽しみにしているもんですかっ！ あたし、年下趣味じゃないわ」

「だって、いつも楽しそうに子供たちにまじつて、遊んでいるじゃないの……」

恨みがましい目で、美鈴つてばあたしを見る。

あたしはぎょつとして勢いよく首を振った。本当に、冗談じゃない。

「あたしは美鈴と違って、シヨタじゃないの。いやいや遊んでるのよっ」

「あらっ。あたしだってシヨタじゃないわよ？」

「……小学生に色香を感じるなんて、シヨタ以外の何者でもないわよ。……ま、それはともかく、公園に行くなら一人で行つて。あたし、あのくそガキに会いたくないの」

「え？ やだっ、ついてきてよ。友達じゃない。一人で行つてもつまらないし、それに 変に思われちゃうじゃない！」

美鈴ががっしと箸を持っているあたしの手を握りしめる。

その反動で、箸にさしてあつた卵焼が弁当箱へ逆戻りしてしまった。

「もう、充分変に思われているわよ」

再び卵焼に挑戦しながら、あたしは高広の顔を、ぼんやり思い出していた。

市原高広。

あたしの母校である近所の小学校の五年生。いわゆる後輩つてや

っ。

放課後、学校のすぐ前の大きなグラウンドのある公園で玉遊びに興じているグループの中心的存在。

子供らしいハスキーな声に、ぱっちりとした大きな目。

思わず触れなくなるような、やわらかそうな髪の毛。くるくるとよく動く、でも賢そうな表情。

本当に将来が楽しみで、かわいくて、美鈴がシヨタに走るのもうなずけてしまうくらいいの、いわゆる美少年、なんだわ。

そう、外見は。

あたしも騙されたクチよ。黙ってれば弟に欲しいと、シヨタでないあたしが思うくらいだもん。

けれど、顔がいいくらいじゃ、生意気盛りの小学生のリーダーにはなれないのよね。しみじみ思い知った。

まず、高広は、恐ろしく口が悪い。彼の辞書には敬語という字が存在していないのはつくづくらいに悪い。

おまけに超生意気。あたしと美鈴なんか、未だかつて年上扱いされたことがないくらいだ。

更に、こつちが恥ずかしくなる程、ませている。

子供って、大体この年齢はませているものだけど、それに輪をかけて早熟なのだ。

ほんと、会った瞬間に挨拶代わりに殴ってやりたくなる程の子供なの。高広って。

それが目下美鈴の一番愛しい人だって言うんだから、シヨタの趣味ってわからないわあ。

そりゃあ、長い目で見れば、いい男になる可能性も無きにしも非ず、だけど。

けれど、以上の理由だけであたしは高広に会いたくないと思っているわけではないのだ。

腕力で勝とうと思えば、勝てるもの。六歳の年齢差は伊達じゃない。

じゃあ、なぜ会つのを躊躇ちゅうちうしているのかというと。
聞いてびっくり、見てびっくりだよ。

未だにあたしは信じられないくらいだわ……。

ああ。悩んでしまうというより、あたしははっきり言って、悲しい……。

だって。

だって。

その高広に。小学五年生に。愛の告白つてのを、されてしまったんだもの。

「何だ。また来たのかよ？」

結局押し切られて、無理やり公園に連れてこられたあたしと美鈴と見るなり、高広はそう言った。

「悪かったわね。来たくて来たわけじゃ……」

「高広くん、今日は野球なのね」

あたしの言葉を遮った美鈴の台詞に、グラウンドを見渡すと、グローブを手にした子供がキャッチボールしたり、バットを振り回しているのが目に入った。

高広も、左手にグローブをつけている。

「あんた、どこのポジション？」

ふと聞いてみる。すると高広はふふんつと不敵に笑って、

「オレが、ピッチャー以外の場所につくわけないだろ？ 打順はもち四番だぜっ」

……高広は、自信家で傲慢でもあった。

あんた、その歳で俺様ってどうよ？

「すごいっ。さっすが高広くん」

惚れた弱みなのか、盲目なのか、美鈴はやたら高広を褒める。

これが高広を増長させている原因だと思うぞ、あたしは。

「そうだ、毎子。メンバー足りないんだ。入るか？ 小学生の球を打つ自信がなけりや、やらなくてもいいけどさ」

思わずムカツ。呼びつけも氣にくわないが、人を馬鹿にした態度も氣にくわないっ。

「美鈴っ！ やるわよっ」

ぐつと拳を握りしめて言ったあたしに、美鈴はあっさり答えた。

「あたし、やめとく」

「あら、どうして？ 具合でも悪いの？」

「うん……うん。そ、そういうわけではていけど、さ」

「あ、オレわかった。あれだろ？ 女の子の日ってやつ……」

妙に嬉しそうに高広はとんでもないことを口にする。

あたしはとっさに、二十センチは低い高広の頭をゴインツと殴った。

「痛ってー！ 何すんだよっ。このババア」

……ほんつと、かわいい子供だことっ。そのババアに愛の告白なんてことしたくせに。「お黙り、この恥知らず。とっとと守備位置につきなさいっ！」

痛い痛いといわめく高広を、グランドの方へと突き飛ばすと、あたしは真っ赤に頬を染めている美鈴に向き直った。

「本当にどうしたの？」

いつもは、スポーツが苦手なわりには高広と一緒にいたいが為に、参加するのに。

美鈴は頬を染めたまま、ぼそぼそと口の中で何かをつぶやく。

聞こえはしなかったものの、何を言いたいのか、わかった。

つまりは、高広のバカタレが言ったように、女の子の日だったってわけね。

美鈴はハーツとため息をついた。

「あーあ。毎子がうらやましいわ。高広くんだって気さくにお話できて……。あたし、何話していいのか、わからないもの……」

「うらやましくなんて、ないないっ」

「おい。毎子お。早く打席に入れよ。何悠長に話してんだよー」
グランドの中央から、高広の声がかかる。すっかり用意は整っているようだ。

「今行くっ」

年上の意地を見せてやる。鼻息も荒く歩き出したあたしに、美鈴が声をかけた。

「毎子。手加減してあげてね。高広くんを傷つけちゃいやだからね」
「……」

……わざとぶつけてやる。あたしはそう決心した。

結局、勝負は引き分け。

あれほど望んだにもかかわらず、高広に球をぶつけられないうちに、夕日が沈んでしまったのだ。

薄暗くなったグランドで美鈴と別れると、あたしはそそくさと歩きだした。

悲しいことにあたしと高広は同じ町内に住んでいるのだ。

みんながいるならともかく、二人きりになるのはまずい。とてもまずい。

そう思っていたのに、しかし、高広はあっさり追いついてきてしまった。

「どうして、さっさと帰ろうとすんだよ」

先にグローブをさしてあるバットを担いで高広はあたしの隣に並んだ。

「あたしは一人で帰りたいのっ。あんたは友達と帰ればいいでしょ」
「こっちの道行くの、オレ一人だもん。……あ、毎子、オレを避けてるな？ そうだろ？ この間言ったこと、気にしてるんだ」

にやにや。意地の悪い笑いをする。

図星だったものだから、あたしはかあつと赤くなってしまった。
も、もしかして、この間の告白は、あたしをからかうためだった

んじゃ ？

小学生が高校生に惚れたと考えるよりは、そっちの可能性の方が高い。とすると、悩んだ（悲しんだ）あたしが馬鹿みたいじゃないか。

そんなあたしの考えが分かったのだろうか。高広は急に真面目な顔になって、

「言っておくけど、オレ本気だよ。悪ふざけで言っただんじゃないかな」

「……冗談……」

ぴくぴく。顔が引きつってしまふ。

何と言っているのか、判らなくて、途方に暮れてしまふわ。

「冗談じゃないって。オレの言うこと信じる。男が一世一代の大告白したんだからよ」

「な、何が一世一代だ。人を待ち伏せしたあげく『オレの女になれ』だなんて。あんた、あたしを馬鹿にしてるわね？」

そう。この間、家の前で突然立ち上がった高広は、しばしあたしを上から下までじっと見つめ、それからおもむろに言ったのだ。

「決めた。毎子、オレの女になれよ」と。

絶句していると、「何だか知らないけど、好きになっちゃったんだよなあ。あ、返事はちゃんとくれよな。できれば、いい返事」などと勝手に言いまくり、あたしの頭を真っ白にしたのだ。

「馬鹿になんてしてないっ」

高広はむきになって言った。

「オレ、正直に言っただけだ。年齢だっただけにしない」

「あたしは気にするのよっ。すっごくっ！」

「愛があれば歳の差なんて関係ないって、テレビのドラマで言っただぞ」

「愛なんてないわよっ」

あたしはなんだか泣きなくなってしまった。

何が楽しくて、こんな道の真ん中で小学生に口説かれなくちゃならないんだ。

「心配すんなよつ。オレが愛してるからさ」

自信満々に、高広は告げる。

全く、こんな言葉をどこから覚えるのだろつ。小学生の言うせりフじゃない。

「オレ、将来すっげーかつこよくなるんだぞ。今だつてかつこいいけどさ。そのオレをふったら、毎子絶対こーかいすんぞ」

「……後悔つて、漢字で書ける？」

ぽつり、言つと、高広はぐつと言葉につまる。

やっぱり小学生。ませていても語彙力ないや。

もつとも頭のいい子なら答えられただろうけど、高広は、どう見たつて頭いいとは思えないしなあ。

「五年後に出直してらっしゃい。その時、あんたの言うようにかつこいい男になってたら、つきあつたげる」

高広のやわらかい頬を、両手でむにゅとつねる。

背だつて、あたしより低い。何より六歳も年下じゃないか。考えるだけで無駄無駄。

あつさり決断を下すと、あたしは両手で頬をおさえている高広を残して、さつさと歩き出した。

「何だよ、五年後につきあうと決まつてんなら、今からだつていいじゃないか。けちつ。けちな女は嫌われるぞ。そんな物好きは、オレくらいなもんだからなつ」

背後でそんなことを高広は、わめいたのだった。

名誉のために言つが、あたしはシヨタではない。そんな趣味は、全然全くない。

あたしの理想は、背が高くて優しくて、贅沢言つなら年上の人、

なのだ。

六歳も年下は問題外。だから、悩む必要なんてない。

ないのに、どうしてだか、気になってしまふのだ。高広のこと、そして美鈴のこと。

実はどうか、当然というか、あたしは美鈴に高広とのこと話してない。

だって、一応高広は美鈴の好きな人なのだ。その高広に告白されたなんて、言えないわ。

それにあたしにだってプライドがある。

生まれて始めてモテた相手が、小学生だなんて、笑い話にしかない。それじゃあ、あまりにあたしが哀れだし、なんといっても虚しいすぎるわ。

だから誰にも、特に美鈴に知られる前にカタをつけてしまいたい。馬鹿な感情は捨てて、前のようにケンカ友達（？）に戻ろう。そう思っているのに。いるのにっ。

ところがあいつ、あきらめなかったのだ。

あたしと二人きりになると 避けているのに、どうしてだかついてくる しつこいくらいに、口説こうとするのだ。

それでも二人きりの時、っていうあたり、けっこう気をつかっているのかもしれないが。

「毎子ってば、本当に冷たいよな。普通これだけ言えば、情にほだされて折れてくれるもんなのに……」

夏の暑い日に照らされて、すっかり焼けてしまった頬をぐいっと手で拭いながら高広はぼやく。

汚れをとるつもりだったようだけど、手の方が汚れていたため更に汚くなってしまった。

夕日のせいで、赤いのか黒いんだか、全く区別つかない。

とぼとぼと歩きながら、あたしは仕方なしにハンカチを高広に差し出した。

「へへっ。サンキュー」

うれしそうに高広は笑って、赤色の　　とは言っても本当は白いのだが、夕日のせいで赤く見えてしまう　　ハンカチで、遠慮なく顔を拭った。

「だったら、情にほだされてくれる女の子を口説けばいいじゃない。それだけ熱意があれば、中にはおちてくれる女もいるかも……。そういう相手はいないの？　同世代に」

「だいたい、情にほだされるなんて、意味判ってて言っているのだから？」

「だめだめ。あいつら、オレたちを馬鹿にしきってるもん。もっと年上の、頼れる男がいいんだってよ」

「女の子の方が、男の子より早熟なものね。同じ歳より、年上に憧れるものよ……」

何気なく言って、ふとひっかかりを覚える。

別にそれは女の子に限ったことじゃない。男の子だって、思春期は憧れるものだ。そう、年上の女性に。

「わかった。それだ。そうに決まってる」

「……何が？」

怪訝そうに眉をひそめる高広に、あたしがあれこれ説明してやると、

「じゃあ、オレが毎子を好きなのは、その年上に対する憧れだっていうのか？」

うなずくあたしを、高広は馬鹿にしきったように笑った。

「自分というものを、よく考えたこと、ある？　その考えでいくなら、毎子より美鈴の方を好きになるよ。オレは」

などと、聞き捨てならないことを言う。

「……あたしが、年上らしくないと言うのね？」

ひくひく。抑えてるのに頬が引きつってしまう。

「だってさ、外見は高校生だけど、小学生相手に遊びで本気になるだろう？　それ見ると、どうしても年上に思えなくてさ」

ぎりぎり。歯ぎしりしてしまう。

「あれ？　もしかして、怒った？」

「そこまで言われて、楽しくなる奴はいないわよ……」

こんなとんでもないガキに好かれてしまったあたしって、もしかして不幸なのかもしれない。そう思う。しみじみと。

高広は、外見だけはいいいその顔を綻ばせ、あたしを見上げて言った。

「ごめん。でも、本当だからさ。オレが毎子を好きなのは……。憧れなんかじゃ、絶対ないよ。誓うよ。だから、少しは真面目に考えてくれよな。毎子」

にこつと笑ったその顔は、やけに大人びていて、あたしは怒りも忘れてどきつとしてしまった。

そして、まずいことに、その後すぐにへへつと照れてしまった高広を、かわいいとも思ってしまったのだ。

車だけが多くて人通りの少ない公園前の通りを、二人並んで歩きながら、あたしは、そんな自分の心に心底驚いていた。

前編（後書き）

『年下』をテーマにして書いた短編。
俺様小学生を書くのは楽しかったので、話がサクサク進みました。

後編

これは、もしかして、すっごくまずいのではないだろうか？
あたしは帰りのしたくをしながら、ぼんやり思った。

情にほだされるということはないけど、よもや、高広をかわいい
と思ってしまうなんて。六歳も年下なのに。

……いや、年下だから思うんだけどさ。

「美鈴……もし、もしもよ？ 高広に愛の告白をされたら……どう
する？」

後ろの席で、同じく支度をしていた美鈴は、その言葉に我を忘れ
た。

「気を失っちゃうくらいに嬉しいわ！」

あまりに大きな声で言うものだから、隣の席の男子が怪訝そうに
あたしたちを見た。

「ば、ばかばか、声がでかいっ」

「うっ。ごめん。……だって、毎子ってば、突然どうして？」

どきっ。あたしは内心あせりつつも、冷静を保つ。

「いや、別に。……そ、それじゃ、高広に彼女が出来たらどうする
？」

「い、いるの！？ そういう子が！」

「も、もしかしたら、だってっ」

あまりの形相に、あたしはビクビクしてしまった。

うっっ。

これは絶対に、高広との事言えないわ。言ったら殺されちゃうー。
「……だけど、あと一年少しもすれば高広くんも小学校卒業しちゃうのよね。あたしの好きな高広くんじゃなくなっちゃうんだわ。好きな子も、彼女もきつと出来るだろうっし」

ほう。悩ましげにため息などつく。

大人っぽくて、美人の美鈴が、実は小学生に恋焦がれているだな

んで、誰も思うまい。

「あたしさあ。思うんだけど、美鈴はもつと年相応の人に目をむけた方がいいと思うの」

「……年くつた人なんて、かわいくないわっ」

美鈴は顔をしかめる。

かわいいか、かわいくないかで決めるなんて、絶対歪んだら。

あたしは美鈴を正常の道へ戻すべく、頭を働かせつつ言った。

「けれど……その人たちだって……ほら、昔はかわいい男の子だったのよ。そう考えればいいのよ。高広だって、時がたてば大人になっ
つていちゃうんだし……」

「それはそうだけど……。ああ、どうして神様は永遠に子供のままでいさせてくれないのかしらねえ？ ……いえ。わかっているの。そうよ。みんな大人になるのよ、いつか。好きな子もできるでしょう……」

結局美鈴は、高広個人というより、子供が好きみたいだ。

今現在、美鈴にとっては、高広という小学生は、彼女の好きな『お子様』の象徴。

もちろん、高広の人格とか性格とかも認めてはいるけれど、それは決して<永遠>というわけにはいかない。

そんな部分を、美鈴は愛している。

今しか高広がもっていないもの。彼が永遠に持ちつづけてはもらえないもの。

「好きな人も、もしかしているかも。やただなあ。誰のものにもな
つて欲しくないのに」

「……自分がそうなるうとは、思わないの？」

なんだか、しっくりいかない。
美鈴は間違っていない。それは、判る。そういう愛し方である
もの。

そもそも、美鈴は高広に本当の意味での恋をしているわけではな
いんだ。

彼が、少年であるから。子供だから。

でも、高広は成長していく。少しずつ、少しずつ。

大人になっていく彼を、美鈴はどう受け止めるのだろうか？

でもあたしは、違う。

美鈴とは、まったく違った意味で、高広が＜子供＞であることにこだわっている。

美鈴は、高広の子供の部分が好き。でも、あたしはあいつが子供であることが、嫌。

美鈴は、高広がずっと子供であることを願っている。あたしは彼が早く大きくなることを、多分、願っている。

まるで両極端。

どっちがいいんだろう？ どっちが駄目なのかしら？

美鈴は、高広が成長していくことを、認めるべきなのかしら？

あたしは、あいつが子供であることを、認めるべきなのかしら？

美鈴は、高広があたしを好きだったこと知ったら、どうするかしら？

「あたしが高広くと……？」

きょとんと美鈴は目を丸くする。

「思わないなあ。……わからないかな。自分のものにもしたくないかわりに、誰のものにもなって欲しくないのよ」

…… すいません。ちつともわかりません。

結局あたしは美鈴の恋敵ってことになるのかなあ？

何か納得できないんだけど。何もかもが。

「それって、つまり、アイドルとか、タレントとかに対するファン心理ってやつ？」

「そうそう。そんな感じ」

美鈴は満足そうに微笑んだ。

「だから、あたしは高広くん恋しているんだけど、世間一般の恋

じゃないの。高広くんは、かわいくて好き。性格も容姿もお気に入
り。だけど……こんなオバさんの毒牙にかけちゃいけないの」

ど、毒牙。

「やっぱり、シヨタだってこと、認めてるのね？」

「まあ、失礼ね、毎子。あたしはシヨタじゃないわつ。ただ、男の
子が好きなだけよ！ 一生懸命な男の子、がね」

「一生懸命って……高広のこと？」

首を傾げてしまう。

けれど、あたしを口説くことに関しては、確かに一生懸命だわ
ね、あいつは。

あたしはこっそり肩をすくめた。

「そろそろ返事くれても、いいんじゃない？」

いつものように皆と別れて帰途についたとたん、高広は言った。

「あんた……そのセリフはあたしが断るとは全然思ってたんだね
？」

「あつたり前だ」

自信満々の顔で答える。

「こないない男フル奴はいないさ」

あたしは口をあんぐり開けてしまった。

あ、呆れてものが言えないわ！

これが小学生の言う台詞？

将来が不安だわ、今からこんな事言っちゃ。

あたしは沈みつつある夕日を、途方にくれた目をして眺めた。

ほんとうに途方に暮れていたのよ。だって、何て返事をしたら
いいのか、わからなかったんだもの。

そんな黄昏ているあたしの様子を見て高広は、見事な曲解したら
しい。

「美鈴のこと気にしてんのか？」

高広は、美鈴が自分の事を好きだつてこと、ちゃんと知っている。苦笑しかけたあたしは、はっとした。

美鈴？ そうだ、これだわ！

「そうよ……。あなたは親友の大切な人。そのあん、じゃなくて、あなたを美鈴から奪うなんてこと、出来ないわ。……だから、あたし、諦めるわ。高広のこと。涙を飲んで……」

あたしはよっと泣く真似をした。

ちよ、ちよっとやりすぎたかしら？ 声も平坦になってしまったし、芝居がかつてたし……。

「わざとらしい」

案の定、こんな演技には騙されなかった高広は、顔をしかめてつぶやいた。

やっぱ、この手も駄目か。

「確かに美鈴はオレのファンだけど、普通女は友情より、恋をとるんじゃないの？」

「馬鹿。あんたって、本当、子供ねえ」

「な、何だよ、それはっ！」

と言い合いになりかけたその時。

ボタンつと何か物が落ちる音が近くでした。

「ど、どういうこと、なの？」

この声。

ま、まさか。

おそろおそろ振り向いたあたしの目に、鞆を取り落としたまま立ちすくむ美鈴の姿が写った。

顔から血の気がさーっと引いていく。

「み、美鈴……こ、これは、その……」

ど、どうして美鈴がこんなところにいるんだろっ。まったくの正反対の方向だったはずなのに。

てんでんてん。

通りの端の方にボールがバウンドしていく。それは、ついさつきまであたしたちがグラウンドで使っていた野球のボールだった。

高広が忘れてきたボール。それをとどけるために、わざわざ反対の方向にきたんだ。

そう考えた瞬間、あたしの心は罪悪感で一杯になった。

「き、聞いてちゃった、のか？」

うるたえたような声で、高広が尋ねる。

何を、とも言っていないのに、美鈴はこくと頷いた。

「全部。そういう、こと、だったのね？ だから毎子はあたしにあんなこと聞いたんだ」

口調は静かだった。そこまでは。

「だったら。だったら、言ってくればよかったのにっ！ あたしがっ、反対したり、ごねたり、嫌だと言うと思ってたのっ？ 言わないわ、そんな事っ。どうして……どうして、隠したりしたのよっ」

美鈴の両方の目に涙が溢れた。

美鈴は怒っていた。高広があたしを好きになったことではなくて、あたしがその事を彼女に隠していたことを。美鈴を、信用していなかったことを。

どうしよう？ どうしよう？

あたしは恐慌状態になりながら、でも何も言えなかった。

「……」

美鈴は何もいわず、鞆も拾わず身を翻した。

今来た方向　公園へ向かって走り去る。

あたしは声もなくその後ろ姿を見送った。

どうしよう？

どうすれば、良かったんだろう？

高広が美鈴の残していった鞆を拾い上げた。

多分、友情より恋をとるなんて軽々しく言ったことを、後悔して

いるのだろう。神妙な表情だった。

「……行けよ。追っていきなよ」

ぽつり、つぶやく。

え？と顔を上げたあたしに、高広は鞆を差し出しながら、

「オレの片思いなだけだ。そう言いなよ。……それが事実だもん、くやしいけど。追っていつて、ごめんって伝えてよ」

「高広、あんたって……。いい男、ね」

美鈴の鞆を受け取ると、あたしは高広の体をぎゅっと抱きしめる。なんて言うか『負けた』って、正直思ったのだ。

「何だ、今頃わかったのかよ？」

おとなしく抱きしめられながら、照れくさそうな声で、高広は言った。

「けど、言っておくけど、諦めたわけじゃないぞ。オレが好きなのは、毎子だからな。大きな声でそう言えるように、美鈴の許可を貰ってこい。喧嘩になったら、味方してやるから。すぐ行くから」

あたしは走った。

さっきまでいたグラウンドに出て、その奥の公園内に入る。

ジャングルジム、砂場を抜け、出口付近のブランコに差しかった時、三人の大学生らしい男に囲まれている女の子の姿がちらりと目に映った。

ぎよっとして足を止める。それは美鈴だった。

「お茶しようよ。こんな所で泣いてたら変に思われるって」

「そうそう。冷たいものでも飲んで、落ち着きなよ」

などという会話が聞こえるから、ナンパされているのだ。

「オレたちじゃ、嫌？」

それまで、一言も声を発しなかった美鈴は顔を上げ、三人をかわるがわる見た。

やばいかもしれない。あたしはとっさに間に入った。

「ちょっと待ちなさいよ」

「毎子？ 追いかけてきたの？」

涙に濡れた顔であたしを見る。

嫌がるかな、と思ったけれど、美鈴は変わらず悲しげではあったけれど、小さく笑った。

「……鞆。持ってきてくれたのね。ありがと、ごめんね」

「ううん……あたしの方こそ、ごめんなさい。高広もね、ごめん、って言ってた。追っ掛けていけって言ったのも、あの子なの」

一呼吸おいてから、あたしは付け足した。

「……けっこ男の子してるわ。柄にもなく、かっこいいなんて思っちゃった」

「やあね。高広くんはもとからかっこいいのよ？ あたしの目に、狂いはないんだから」

ふたりして、そつと微笑み合う。

「彼氏と三角関係なのか。そんな奴ふっちまえよ」

「そうだ。そうだ。」

周りの男たちはあたし達の台詞を聞いて、何だかピントの外れたことを言った。

あたしは内心苦笑。

確かに、今の会話聞いていたなら、そう思えるだろう。三角関係には違いないし。

「そっちの彼女も行こうよ。お茶にさ。お兄さんたちがおごってやるから」

「い、いえ、結構ですっ」

あたしはあわてて言う。

けれど、美鈴はどうしたとか、行く気になっているらしい。

「この人たちだって、昔は可愛い男の子だったのよ。そう思えば……」

「こ、こらこらっ」

それはあたしが前に言った言葉だ。

た、確かにそう言ったけど、時と場所と場合と、そして人も選んで欲しいわっ。

「あ、あたしたち、彼が待ってますんでっ」

あたしは美鈴の手を無理やりひっぱった。

「あ。つれないなあ。別に何もしないっていうのに」

「毎子！ 美鈴っ」

男の声と、高い男の子の声が重なった。

げっと思いつつ振りかえると、そこにはバットを担いだ、半袖半ズボンの少年が立っていた。

高広。いつの間に。

「おい、にーさんたち。オレの女に手を出さないでよ」

「ちょ、ちょっといつ誰があんたの女になったってのっ！」

言うにことかいて、全く、何て事をつ。

「高広くん、素敵っ」

と美鈴。今の今までの様子はどこへ行ってしまったのやら、だ。

三人の大学生たちは、高広を見、美鈴を見、そして最後にあたしの方を向き、何か頬を引きつらせながら尋ねてきた。

「も、もしかして、こいつが君たちの三角関係の男？ 君、アレの女なの？」

「うっ」

あたしは答えに詰まった。

この人たちについていくのも嫌だけど、そんな事肯定するのも、プライドゆるさないっ。

否定の言葉を口にしかけた時、それよりも早くに、誰かが横から口をはさんだ。

「そうよ。あの子、この子の彼氏なのっ」

み、美鈴！

何て事をおお。

三人は同時に吹き出した。爆笑といってもいいくらい。

さっき頬を引きつらせていたのは、どうやら笑いを抑えていたか

らしい。

「い、いや、悪かった」

げらげら笑いながら、中のうちの一人が言った。目には涙が溜まっている。

「彼氏がいるなんて、思わなかったんだ……くつくつくつ……」

そ、そんなに笑うことないでしょ！

「か、彼氏に免じて、今日は退散するわ。オレら。くつくつくつ」

「おい、ポーズ。彼女大切にすんだぜ。じゃあな。ぷぷつ」

げらげらと笑いながら、大学生たちは歩き出した。

あつさり引き下がってくれたのはいいけど、な、なんか複雑。

やっぱり小学生を彼に持つなんて、笑いの種にしかないもんなんだ。

彼ら、あたしの視界から消える時まで、腹を抱えつつ、笑っていた。

「高広くん。高広くん。かつこよかったわよお」

「ふふん。あつたり前っ」

二人は二人で、さっきのことは忘れたようにきやらきやら笑いながら言い合っている。

……ああ。めまい。

「しかたないわ。高広くんのこととは諦めて、毎子に譲るわ。ああ、あたしって健気……」

数日後。

美鈴は言った。あたしの意味は無視して。

「ちょ、ちよっと、美鈴？ あたしはまだ高広と付き合うなんて言っていない……」

「高広くんをふるっていうの？」

目を半開きにして、あたしをにらみつける。

あたしはあわてて首を振った。弱みがあるから、あたしは美鈴に

強く出れない。

だけど、高広と付き合うのは、ちょっとお……ねえ。

大体、デートしても、小学生相手じゃ奢ってもらうことも出来ないんじゃない？

良くて割り勘。悪くて、あたしの奢り。

ちよつと冗談じゃないわ。世間体っていうのも、あるしー。

だいたいデートに誘ってもくれないんじゃない？

相変わらず、楽しそうに球遊びに興じているし……。

「幸せにね。毎子」

にっこり。美鈴は笑った。

美鈴の方が、幸せそうだ。

「よつ。高橋、年下の彼は元気か？」

「シヨタの鑑！ 年上の彼女！」

「ひゅうひゅう」

あたしとすれ違いざまにクラスメイトの男の子たちが口々にはやし立てる。

周りの女子はくすくす忍び笑い。

あたしはぎりぎりど歯ざりした。

ここ数日の間に、あたしが小学生を彼氏にしているという噂が、クラス中に知れ渡っていた。

犯人はもちろん、あたしの目の前でのっこり笑っている女。でも、文句も言えない。

……ああ。どうしてあたしがこんな目にあわなくちゃならないの？
しくしくしく。

幸せそうな、みんなの中で。

あたしだけが、不幸 だった。

【END】

後編（後書き）

きつと毎子と高広はなし崩し的に付き合うことになって、そしてそのままズルズルと付き合い続けることになるのでしょうかね。

一応、高広は美青年に成長していく（でも俺様）という設定なので、長い目で見れば毎子はいい買い物をしたということで（笑）

シヨタのタグをつけておきながら、愛くるしい少年が出てくる話ではありません……。

期待されていた方はゴメンなさいです。
でも個人的に気に入っている作品です。

読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023m/>

年上の彼女と年下の彼

2010年10月8日12時23分発行